

日本赤十字松江病院（通称 松江日赤）外科部長 木村正也先生

川崎医療短期大学 左利 厚生

「患者に医療行為がどこまで必要かを適切に判断するのが医者の仕事だ」

外科医になり2年目の昭和42年の新年に松江日赤に赴任した。卒後1年間は大学病院で過ごしたので、関連病院へ赴任するのはこれが初めての経験であった。1月の夕刻、松江駅に降り立った時は、辺りはすっかり暗くなり駅は雪の中に埋もれ、その寒さに震え上がった。思わず松江日赤へ赴任することになった自分の不運を呪った。山口大学（当時は県立医科大学）第一外科が、新しく関連病院となる松江日赤と倉敷中央病院のそれぞれの外科に医師を派遣することになり、私と1年目の医師が赴任することになった。しかし、2人とも倉敷中央病院を希望したので、くじ引きとなり、私が松江日赤と決まった。

雪深い夜の松江駅で外来婦長の出迎えを受け、木村正也外科部長（以下木村先生）宅へ直行し、木村先生ご夫妻の暖かい歓待をうけた。松江日赤の外科の現況を聴きながら、木村先生は難しそうな印象だったが、その話のし方にはあったか味があり、地方の病院にしては規模も大きそうだし、案外良い病院に赴任してきたのではないかと感じ、ほっとしてその夜遅く、宿舍へ帰った記憶がある。

木村先生は陸軍士官学校から京都大学医学部へ進み、卒業後は郷里の松江日赤に就職し当時は外科部長として勤務されていた。木村先生は瘦身の180cm近い長身で、色浅黒く、寡黙で、口を「へ」の字に曲げ、背筋を伸ばし、まっすぐ前を見て大股に歩く姿はまさに陸士出の軍人そのものであった。しかし、笑顔になると、眉



Fig. 1

松江日赤外科の外科外来の一室
右より

木村正也外科部長（この笑顔は珍しい）

西川先生（脳外科）

高橋脳外科部長

私（外科）

大沢先生（外科）

脳外科の西川先生も我々と同年代で、暇が出来る
と、三人でしばしば、近くの皆生温泉へ遊びに出
かけた。

